

第 7 回 (11/19) 窒息する友人関係

(福重清、2006、「若者の友人関係はどうなっているのか」浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房)

1. 前回の課題 (再掲)

授業 HP の掲示板 (BBS) への書き込み

- ・ 初回～第 6 回までの授業運営に関するクレーム・リクエスト・感想
- ・ 期限：1 週間 (11/18 23:59 まで)

「早口でなにを言ってるのかわからない時があり聞き取れない時があります。」

「…今まで授業を、受けて話し合いをするという練習にはなっているのだけれど慣れないし上手く話せるようにならない。」

「講義に関してですが、全然として何を議論してよいか明確にわからず話が消化不良のまま進んでしまっている気がします。」

「先生が長文話した後いきなりマイクを渡されるので、どの部分について答えれば良いのか一瞬戸惑ってしまいます。」

「話し合いの時間が足りなくて、いきなり終わってしまって、まとまっていないまま、発表が始まってしまうので、ディスカッションの時間をきちんと決めて欲しいです…。」

「話し合いが中途半端な状態で、意見発表に進むので戸惑う。話し合う時間と考える時間を、しっかりととってください。」

「話し合いの時間が足りなかったり、全体が理解してなかったり、最終的な話のまとまりが分からなかったりすることが多いです。さまざまな視点から話を深く掘り下げていくならば、話し合いの時間を 1 時間にするか、最初からグループワークにするなどの工夫をしないと、話についていくことだけで精一杯になってしまうのではないかと思います…。」

「講義終盤で議論が進んでいくと話していた論点が度々変わることがあり、もう少し同じ論点で意見を聞いたり、考えるようにした方がより良い話し合いができるのではと思います。」

「講義に関しては、一気に多くの問いを与えられて結局今は何について考えれば良いのかわからないでいることが多く、最終的にもモヤモヤした状態で終わることが多いため、問いかけや出された意見をもっと簡潔にまとめて共有してほしい。」

「まず紙を読んで何について話し合えば良いのかとか全然分からなくて、マイクを向けられて何も言えなくて困ってしまいます。授業終わっても、私の頭の中には何も残ってないなって言うのが毎回の感想です。」

「…いつも意見を言って終わりになっているので、少なくともどういう意見があったかぐらいはまとめて欲しいです。」

「授業の最後に、まとめをしてほしいです。発表の時に出了意見によって、先生から新たな問いが次々に出てきま

す。それについての意見も聞いたり考えたりしていて授業が終わるころには、そのテーマについて結局何なのか、どのように考えていったらいいのかわからなくなるからです。」

「…沢山のひとと意見を交し新しい考えを自分に取り入れるのが楽しい。それに自分の意見も少しずつ公の場で言えるようになってきた。あとは自分の思いを上手く伝えられる練習はしたい。しかし一方で一緒に話し合うことが決まった人がやる気がなかったら非常につまらない。エネルギーが負に持っていかれてしまい嫌な気持ちに流されて行くのが嫌だ…。」

「…毎回よく考えさせられる内容ばかりなので、他の子の自分とは違った意見をたくさん聞くことができ嬉しいです。」

「この講義ではディスカッションを毎回行っており、意見を交換し合うことによって議題について様々な視点から深く考えられるようになった。行わなければ視野の狭いただ漠然とした感想を持つことにしかならなかったと思う。」

「授業の運営に関して、毎回の授業であまり自分が気にしていなかった話題についてディスカッションを通して向き合う事が出来るため、いつもとは違う視点から物事を考える事が出来て思考の幅の広がりを感じます。」

「…グループワークを重ねていく上で「話す力」、「聞く力」が自然と身についてくるので良いことだと思います。」

ほか多数

過去の投稿から

「授業内においてディベートを何度も行なっているが、そのどれもが例外なく、難しく感じる。自己の意見を述べ、相手に質疑をし、応答するのは複数の技術が必要であり、自分には持ち合わせていないことを痛感するからだ。意見を述べるにも、相手に納得されようと奮起してしまうか、そもそも自分がどの立場につくのか決めかねてしまうことがある。感情的にならず、判断力をつけるためにも、ディベート毎に反省をし改善をしていこうと思う。」

2. 他者の観念的消失： 中西 （再掲）

「他者の観念的消失」

=意図的であるかどうかを問わず、社会生活のなかで否応なく触れ合う他者の実質を感じとれず受け止められない（経験として内化できない）意識や態度のあり方
他者の介入的態度の具体性を意識のうで消してゆくこと

他者の「実質」

ex.

- 自分を押しつけて通る肉体そのもの
- 自分の内的世界をむき出しにしてしまうように感じられる相手の言葉
- 具体的な親切

- 同じ「境遇」や社会的状況にある者（水平的な他者）を発見しにくく、まして共同などもっとむずかしいという事態
- 日常生活の次元での文字通りの孤立がまさに大衆的な規模で出現してしまい、「わかりあう」関係の困難が親密圏の内部にまで及ぶ、という社会的現実

3. BBS 投稿から

「今回のテーマは考えさせられるなと思いました。授業中は本当にわからない時や、あつて自信がなくて不安な時に「わからない」と言ってしまうし、普段の生活では答えたくない時や、場の空気を変にしたい時に使っていると感じました。「わからない」と使う時は人・場面によって意味合いが変わってくると個人的には思うので「わからない」は相手のためにもなるべく使わないようにするべきかなと思いました。」

「その人と関わりたくないときや対応が面倒だと感じたときに「わからない」を使ってしまうことに気がついたし、ディスカッションを通して同じ意見の人が多いと感じた。」

「「わからない」については、人の誘いなどをやんわり断るために使ってることが多い。会話の相手が親しい人の場合はとりあえずわからないと答えておけば相手が勝手に判断してくれるので、それに合わせてればいいやぐらいの気持ちで使っていることが多い。」

「私は、話している相手と会話を続けるメリットを感じられない時に「わからない」と使ってしまうことが多いです。何故なら「わからない」と言うことで相手も自分にこれ以上深追いすることはなく関心も持たなくなると思うと考えているからです。」

「わからないを使うときは、時と場合によるが本当に分からない時と関わりたくない人に何か聞かれて分からないって言う時もある。また、それが相手を傷つけないために分からないって使う時もあると感じた。」

「面倒だからやりたくないという気持ちが若者の心の中に常にあって、「わかりません」を多用するのもその一環でなるべく面倒なことには関わりたくないという気持ちがあるのだと思う。面倒なことから逃げるための手段のひとつとして「わかりません」が使われていると考える。」

「「わからない」という言葉は質問内容がめんどくさいと思う時や話す気分が乗らない時に使うことが多い。それは多数の人も思っていたようだ。自分自身友人の会話で「責任逃れのため」に多用している人が多いと感じられる。学生だから許される部分もあると思っていたが社会に出てまで多用することについて驚いた。現代の若者が物事をなまなまにし、責任から逃れる傾向にあるのは確かだろう。」

「仲間以外はみな風景というのには、確かに日常生活の中でそれを感じる場面がよくあった。電車やバスで順番を抜かす、駅で人を避けようとせずすれ違いざまにぶつかってくるなどということがあったが、それが知り合いならばそのようなことはおそらく出来ないだろう。仲間ではない人を仲間と同じはずの「人」として認識をしないから思いやりのない行動が罪悪感なく平気で出来るのだと思う。」

「…仲間以外は風景かということに対して、大学という同じコミュニティにいるのなら、風景とまではいかないと感じられる。同じコミュニティなら関わる機会が少なからずあるからである。だが電車内や移動途中などは風景だろう。」

「…今までの日本は仲間以外はみな風景で何事もなくやってこれたのだからわざわざ変わらなくてもいいと思う。」

ほか多数

過去の投稿から

「日常生活において、足を踏んだり、肩をぶついたりしても何も、言わず平然と通り過ぎる人が多い。また、電車の中で化粧をしたり、音漏れを気にせず大音量で音楽を聞いている人が目立つ。これは、「仲間以外は皆風景」という言葉に当てはまる。しかし、今の私たちには、それが当たり前になってきており、大変恐ろしいことだと感じた。」

「今日、電車に乗り込むと、きっと山に行くであろうおばさんたちが大きな声で話していました。本当に先生が言っていた通りのような感じで大きな声で円になって喋っていました。見えてない。見えてないんでしょう。もう頭の中は今から登る山の事でハイになっちゃっているんでしょう。朝だし人も多かったので大半の人はすごく迷惑だったんだろうなと思うんですけども、その周りの人もそのおばさんたちの事は見えてないんじゃないかと少し思います。除外してるっていうか、でも個人的には楽しい時間でした。」

「正直、私も「仲間以外は皆風景」という考えになってきているのではないかと感じる時がある。街で肩がぶつかった際に、何も言わずに通り過ぎたことがあるからだ。しかし、それは過去にサラリーマンが私の肩にぶつかってきた際に、ぶつかられた私から謝ったのにもかかわらず、サラリーマンは何も言わず、嫌な顔をして通り過ぎるという経験をしたからだ。今の日本は、謝った側が悪いことになるのではないだろうか。しかし、このままでは私のような経験をする人が増え、「仲間以外は皆風景」という考え方をする人が増加するばかりである。」

「「仲間以外はみな風景」という見解は場所によって異なるのではないかと考えた。人が多い都会などではよくあるのかもしれないが、田舎や少数しか人がいないところではそうではないのではないかなと思う。」

「仲間以外はみな風景について。私が外国人交流パーティーに行った時、欧米の人はすごくフレンドリーだった。しかし、私は英語を話せないし面白い話も出来ないで飽きられたのか、飲み物をとってくると言い皆クールに去っていった。日本人はグループの絆が深いが、グループの外に出ると孤立する。日本は、ほぼ人種が日本人のみ、島国で孤立化しているので外から来た人に対してあまり心を開けないと思う。私は、グループの外の人、または外国人と繋がろうという心が大切だと考える。女子は特にグループが好きだから、外の人に関心がないと考える。まさに仲間以外はみな風景。」

「他者観念の喪失は、あると思います。意識をしていない、時々忘れてしまう。どこかで、電車の中のような人しかいない密閉空間では、「意識的に他者を忘れるため、他に意識を向ける」というのが通常で、それを利用して車内の広告がある。そんな話を聞いたことがあります。その話から、スマホの出現で、どこでも手軽に他者を除外できるようになったということかな、とふと思いました。また、家でも、テレビ見ている時は、似た状況になることがあるような気がします。友達間でも。なにもない状態や無音、ぼーっとするという状態が、失われているような気がします。」

4. 確認：議論の方法 ——何を話せばいいのか（再掲）

筆者の主張（相手の発言内容）に対する

① 質問

- 言葉・用語の意味がわからない
- どういうことを云っているのかがわからない（説明があいまい、具体性に欠ける…）
- こういう理解でよいのか（説明が不十分なので精確に理解できない）

② 共感

- この主張、この指摘、この言葉はそのとおりだと思う。的を射ている。
- これと関連して、このような事例も挙げられる／こういう言い方もできる

③ 疑問・批判

- 根拠は？
- 5W2H
- こういうふうに考えることもできるのではないか… etc.

cf. “5W2H” の発想（以下、たとえば）

When

- 昔からそうなのか
- その解釈は今もあてはまるか

Where

- どの社会・地域にもあてはまるか
- 全国一律にそうなのか

Who

- 誰にもあてはまることなのか
- 誰がみても、そういえそうか

What

- 何を云っているのか（正確な理解。著者が主張しているのはどのようなことか）
- 何に対してもあてはまるか

Why

- なぜそういえるのか（根拠）
- なぜその現象が起きるのか（原因）

How

- どんなメカニズムでそうなるのか
- どのように考えるべきか

ホントに？

- ホントにそういえるのか
- 解釈や根拠に誤りはないか

5. 現代の若者の人間関係（土井）

たとえば、

- 昨今の学校現場では、クラスが一つのまとまりとして成立しづらくなっている
- ごく狭い範囲での関係の固定化が進んでいる
- 数人程度の小さなグループの内部で人間関係が完結してしまい、クラス全体の統一性や一体感が生まれにくくなっている

cf. 「グループが異なれば、県が異なるみたいだし、クラスが異なれば、国が異なるみたい」
「島宇宙化」（宮台）

6. 1990 年代以降の若者バッシング論

友人関係の「希薄化」

- 現代の日本社会全体における共同体の崩壊や価値観の多様化から若者の秩序や意味世界を支える規範が失効し、人間関係やコミュニケーションの希薄化がみられるようになった
- 若者は対面的な関係の中で相手に傷つけられることをおそれて、つきあいを表面的なものにとどめようとする傾向を強めている
- 携帯やネットはその傾向を助けるための格好の手段となっている

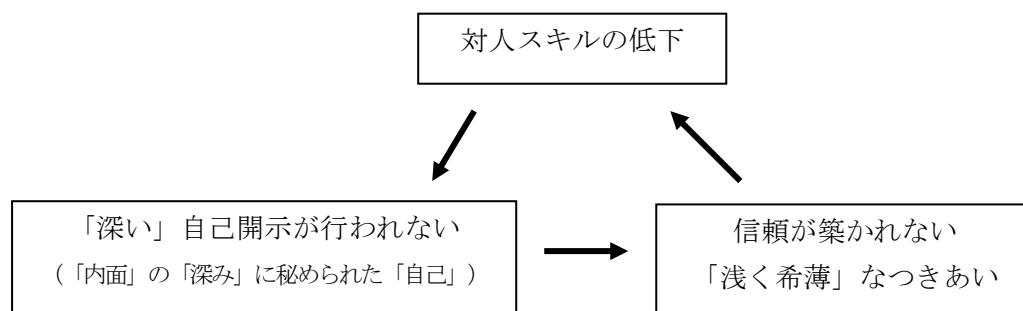
「…少女たちは群れているようでも、『ガラスの関係』だ。お互いを傷つけたり、壊したりしないように気を配る。相手を思いやるでもなく、心を割ってぶつかり合うこともない希薄な関係だ」（東京新聞、2003 年 7 月 19 日朝刊）

「生身の人間とつきあえば傷つくが、キカイ〔携帯やネット〕を通せば大丈夫、やばくなれば off にすればいい、という考えが隠されている」（小原 2002: 28-29）

「現代の若者には「相手の気持ちに踏み込んでいかぬように気をつけながら、滑らかで暖かい関係を保っていかう」と努める、特有の「やさしさ」がみられる」（大平 1995: 71）

- 親密な関係を構築するために必要な能力である対人スキルが低下している

友人関係希薄化の悪循環



7. 福重氏の疑問

- 「希薄化」の変化は、むしろ親密さに関する図式そのものの解体。若者たちの間では、これまでの＜深い－浅い＞といった図式では測りえないような関係が「親しい」「友人」関係を構成すると考えられるようになってきているのではないか
- 友人関係の希薄化によって「社会化」（対人スキルの学習など）機能が低下したというのは本当か
- 友人関係の希薄化とは、たんに「友人」のカテゴリーが拡大し、従来の友人概念も残しながら、これまでは「友人」と呼びえなかったような（従来の図式からすれば）「希薄な」関係も、「友人」のカテゴリーに含まれるようになった、ということではないのか

cf. 友人関係の「選択化論」

現代の若者の友人関係は必ずしも希薄化しているとはいえない

さまざまなタイプの友人が場面に応じて選択的に使い分けられている

↓

- 選択化が希薄化を否定することには必ずしもつながらない
- 選択化と平行して、同時に希薄化も生じているのではないか

8. 現代の若者のコミュニケーション戦略

3 種類の戦略

- ① 初対面の人に対して、さしあたりのコミュニケーションの開始を可能とするような暫定的な共同性を取りあえず信頼してコミュニケーションを開始し、そのコミュニケーションの文脈から外に出ないようにする（自己の内面を開示するようなコミュニケーションには移行しない）
- ② 共有できる信頼の前提を探りながらコミュニケーションの文脈を徐々に展開し、最終的に人格的な信頼を築き上げていく
- ③ コミュニケーションに随伴する「否定」のリスクを徹底的に回避しようとするやり方。あらゆるコミュニケーションからできる限り撤退する。その限りにおいて安心と信頼のできる居心地のよい関係を構築しようとする

＊ 友人関係の質は、もっと多元的な尺度によって測られる必要あり

9. 中間考察

10. 「優しい関係」

「優しい関係」

- 現代の若者たちにとって、周囲の人間と衝突することは、異常な事態
- 自分の身近にいる他人の言動に対してつねに敏感
- 相手から反感を買わないようにつねに心がけることが、日々を生き抜くための知恵

↓

親密な人間関係が成立する範囲を狭め、他の人間関係への乗り換えも困難に

「今、このグループでうまくいかないと、自分はもう終わりだ」

↑

∴ 現在の人間関係だけを絶対視してしまい、他の人間関係のあり方と比較して相対化することができない

ex. ぼかし表現： 友だちとの衝突を避けるテクニック

「とりあえず食事とかする？」 「ワタシ的にはこれに決めた、みたいな」（断定を避ける）

「あ、そうなんだあ…？」（半独言・半クエスチョン）

→ 「対話」ではなく「共話」

「相手に優しい関係」

- 相手の事情を詮索して踏み込んだりしない
- 自分の断定を一方的に相手に押しついたりしない

|

「自分に優しい関係」

- 自分の立場を傷つけかねない危険性を少しでも回避し、自分の責任をできるだけ問われないようにする

11. 窒息する友人関係

「優しい関係」の重圧

昨今の若者たちは「日頃の人間関係にすら安心感を抱きづらくなっている。だから、仲間との関係が一時的にでも揺らぐことを極端に恐れてしまう。自分だけが浮いてしまうのではないかと不安におののいてしまう。その不安を打ち消すために、その場の空気をきちんと読んでノリを合わせ、仲間をシラけさせないようにいつも気を遣わざるをえない。」（土井 2008: 27）

「今日、学校を舞台に繰り広げられている生徒どうしの関係は、〔中略〕「自分さがし」をする人間どうしの赤裸々な関係であって、思想や信条のような社会的基盤を共有したものでもなければ、従来のような役割関係に支えられたものでもない。いわば直感的な感覚の共有のみに支えられた関係である。そして内発的な衝動や直感といったものには、言葉によって作り上げられる思想や信条とは異なって、持続性も安定性もない。その感覚の共有を根拠とする関係は、その時々状況や気分に応じて移ろいやすく、一慣性に乏しい不安定なものとなりがちであ

る。」（土井 2008: 42-43）

「むかつく」

「相手と対立する覚悟がなければ、人はとても本気で怒れるものではない。そして、本気であればあるほど、怒ることには多くのエネルギーを要する。したがって、怒れば不満のエネルギーはかなり発散されることになる。しかし、現在の『優しい関係』の下ではなかなか怒りを示すことができないため、じっさいに胸がつかえてスッキリとせず、『むかついて』しまうようになっているのだろう。」（土井 2008: 45）

「現代の若者たちは、互いに傷つく危険を避けるためにコミュニケーションへ没入し合い、その過同調にも似た相互協力によって、人間関係をいわば儀礼的に希薄な状態に保っているのである。」（土井 2008: 47）

12. 「自分らしさの檻」からの脱出

-

-

↓

-

13. 参考：「不完全な自分をさらけ出す勇気」

→ 配布資料

「人と繋がるには、完全であり、相手にとって価値がように振る舞うことなく、むしろ、不完全な自分を、その相手にさらけ出す必要がある」

14. 検討

【以下、参考】

15. 「青少年研究会」調査の概要

青少年研究会（代表 高橋勇悦 大妻女子大）

調査テーマ：都市部を中心とした若者の意識と行動の特性とその変化

調査対象：東京都杉並区および神戸市灘区・東灘区に住む 16～29 歳の男女

調査実施：1992 年、2002 年

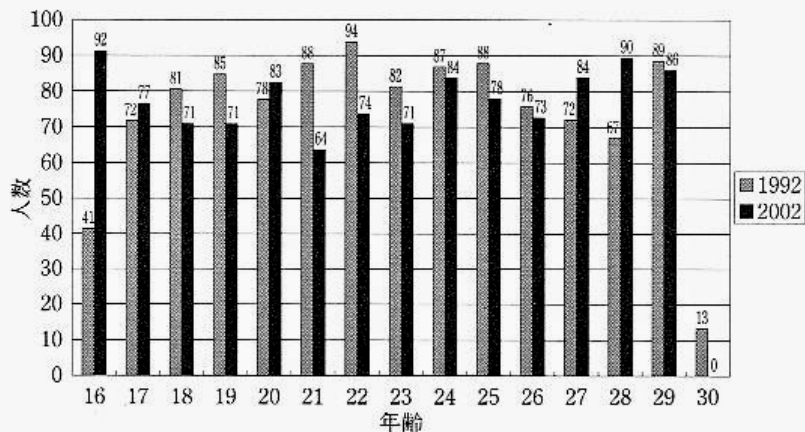
図表 1-1 調査の実施概要

	1992 年	2002 年
調査委託機関	委託せず	輿論科学協会
抽出方法	層化 2 段抽出	層化 2 段抽出
調査方法	郵送調査法	訪問留置法
実施期間	1992 年 12 月から 1993 年 1 月、1993 年 7 月から 8 月	2002 年 9 月から 10 月
有効回収票	1114	1110
有効回収率 (%)	22.1	55.0

図表 1-2 性別

	男性	女性
1992 年	449 40.3%	665 59.7%
2002 年	492 44.8%	606 55.2%

図表 1-3 年齢



図表 1-4 職業 (2002 年調査にあわせて再分類)

再分類した職業カテゴリー	1992 年		2002 年	
	度数	有効%	度数	有効%
1. 学生	448	40.4	461	42.3
2. パート・アルバイト	59	5.3	143	13.1
3. 給与所得者	488	44.0	340	31.2
4. 自営業者	35	3.2	31	2.8
5. その他	78	7.0	114	10.5
計	1108	100.0	1089	100.0

16. 友人とのつきあい方 ―調査結果

友人の量

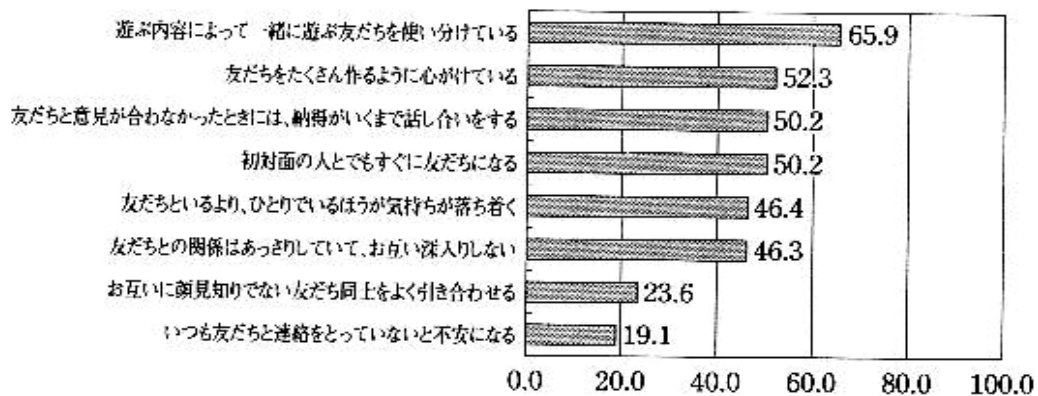
友人が何人ぐらいいるか：「親友」3.8 人 「仲のよい友だち」14.7 人
「親友がいない」6.9 %（1992 年調査 10.1 %）

↓

- 友人関係から大きく徹底しているわけではない。変化したとしたら、つきあい方の質的な変化

友人とのつきあい方

図表 4-1 友人とのつきあい方（肯定的回答の割合（%））



肯定／否定が相半ばする項目が多い

特定の傾向がみられるということではなく、それぞれの人がさまざまなつきあい方をしている

↓

- 単純に「全体的に友人関係が希薄になっている」とはいえない
- × 「すべての友人関係が希薄になっていない」

「使い分けている」65.9 %、「顔見知りでない友だち同士を引き合わせ」23.6 %

↓

- 選択的な友人関係のあり方が、ある程度一般的になっている

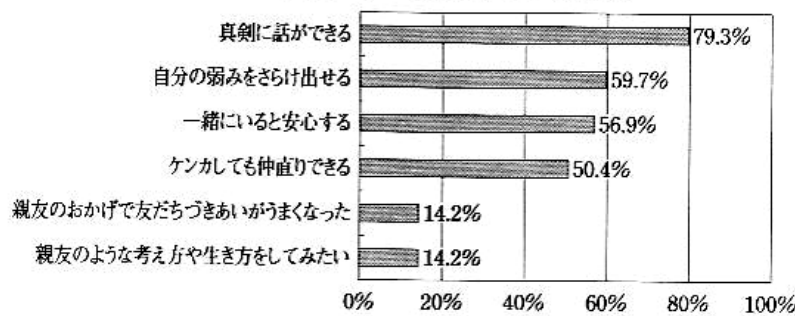
「人によっては友人関係が希薄になっている人もいるし、今でも友だちとはお互いに深くつきあうことを心がけている人もいる」

17. 社会化機能の現状

cf. 友人関係の社会化機能（松井 1990: 290-292）

- ① 心理的安定化
- ② 対人スキルの学習
- ③ 発達のモデルの提示

図表 4-2 親友に対して感じる事（複数回答）



「親友」とのつきあいにみる限りでは…

- 「心理的安定化」と「対人スキルの学習」については、今もそれなりに機能している
- 「発達のモデルの提示」については、機能していない

18. 親しさの要件

図表 4-3 友人と親しくなる際に重視するポイントの因子分析（回転後の因子負荷量）

因子の内容	外面的要素	属性的要素	内面的要素	信用的要素	ノリの要素	肯定的回答の割合
相手の容姿や顔立ちが自分の好みであること	0.842	0.108	0.107	0.045	0.113	21.0%
相手のファッション（服装や髪型など）が自分の好みであること	0.766	0.105	0.182	0.080	0.062	25.1%
相手が同性であること	0.102	0.713	0.016	0.162	0.011	25.9%
相手の年齢が自分と近いこと	0.113	0.686	0.062	0.112	0.234	41.5%
相手の社会的な立場や地位が高いこと	0.291	0.262	-0.019	0.229	0.088	6.0%
相手と趣味や関心が近いこと	0.157	0.076	0.597	-0.016	0.133	82.1%
相手の考え方に共感できること	0.044	-0.018	0.581	0.118	0.023	86.4%
相手の本名（フルネーム）を知っていること	0.103	0.235	0.045	0.556	-0.050	48.6%
つきあいが長く続きそうだと思うこと	0.026	0.049	0.108	0.547	0.289	59.7%
その場その場でノリがよいこと	0.118	0.139	0.114	0.099	0.509	48.3%
負荷量平方和（分散の％） [計 45.5%]	14.6%	11.5%	7.7%	7.3%	4.4%	

※因子抽出法：主成分法

※回転法：バリマックス法

※「相手の社会的な立場や地位が高いこと」は、第1因子の因子負荷量の方が若干大きいですが、ここでは内容的な観点から第2因子の構成要素として解釈している

※「肯定的回答の割合」は、「重視する」「どちらかといえば重視する」という回答の割合の合計

「相手の考え方に共感」86.4%、「趣味や関心が近い」82.1%

↓

- 友人と親しくなるかどうかに関して、相手の内面的な要素を重視している

図表 4-4 友人と親しくなる際に重視する要素と性別、年齢、つきあい方との関連（因子得点の平均値の比較）

		内面的要素	外面的要素	属性的要素
友だちとの関係はあっさり していて、お互いに深入り しない	そうだ	-0.076	0.093	0.076
	そうではない	0.063	-0.085	-0.061
		**	**	**
友だちと意見が合わなかつた ときには、納得がいくま で話し合いをする	そうだ	0.044	-0.040	-0.100
	そうではない	-0.048	0.037	0.109
		*	n. s.	**

※*… $p < 0.05$ **… $p < 0.01$ (F 検定による)

「あっさり、深入りしない」→相対的に、外面的要素や属性的要素を重視

「納得がいくまで話し合い」→相対的に、内面的要素を重視

↓

- 友人とのつきあい方が希薄な人は、親しくなる際には内面的要素よりも、外面的な要素や属性的な要素を重視している
- つきあい方が希薄な人とそうでない人の割合はほぼ半々（上述）。約半数の人は、友人と親しくなる際には「内面的な要素がより重要である」と考えている

19. 引用・参考文献

浅野智彦編、2006、『検証・若者の変貌——失われた10年の後に』勁草書房、第一章、第四章

高橋克徳ほか、2008、『不機嫌な職場 なぜ社員同士で協力できないのか』講談社現代新書

MSN ドニッチ！「浜崎あゆみ “すっぴん疑惑報道” から『弱さをさらけ出すこと』を考える」

（<http://donicchi.jp.msn.com/opinion/goodwill3/article.aspx?cp-documentid=251209429&page=0>, 2012/12/16）

浅野智彦、1999、「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界——若者たちの東京・神戸 90's・展開編』恒星社厚生閣

小原信、2002、『i モード社会の「われとわれわれ」』中央公論新社

影山任佐、1999、『「空虚な自己」の時代』NHK ブックス

大平健、1995、『やさしさの精神病理』岩波新書

久世敏雄、1994、『現代青年の心理と病理』福村出版

諸井克英ほか、1999、『親しさが伝わるコミュニケーション——出会い・深まり・別れ』金子書房

松井豊、1990、「友人関係の機能」菊池章夫・斎藤耕二編『ハンドブック社会化の心理学——人間形成と社会と文化』川島書店

松井豊、1996、「親離れから異性との親密な関係の成立まで」斎藤誠一編『青年期の人間関係 人間関係の発達心理学 4』培風館

松田美佐、2000、「若者の友人関係と携帯電話利用：関係希薄化論から関係選択化論へ」『社会情報学研究』4

E.ゴフマン、広瀬英彦・安江孝司訳、1986、『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版局

大坊郁夫、1998、『しぐさのコミュニケーション——人は親しみをどう伝えあうか』サイエンス社

土井隆義、2008、『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書

菅野仁、2008、『友だち幻想——人と人のくつなぎをを考える』ちくまプリマー新書

鴻上尚史、2009、『「空気」と「世間」』講談社現代新書

森真一、2008、『ほんとはこわい「やさしさ社会」』ちくまプリマー新書
大平健、1995、『やさしさの精神病理』岩波新書
千石保、1994、『マサツ回避の世代』PHP 研究所
宮台真司、1994、『制服少女たちの選択』講談社
中西新太郎、2004、『若者たちに何が起きているのか』花伝社、第 19 話
佐藤俊樹、1992、「解体する日本的コミュニケーション」『ポップ・コミュニケーション全集』パルコ出版

20. 次回の予告

11 月 26 日 自分らしさと個性

以 上

【授業 HP】 <http://t-enomoto.la.coocan.jp/komajo/>

【BBS】 <http://9021.teacup.com/tenomoto4/bbs>

「自分らしさの檻」からの脱出

- 意外性に満ちた体験
 - 異質な人びとと出会う体験 の積み重ね
- ↓
- 生きづらさと正面から向き合い、生きづらさを抱えながら生きていくこと